

高等学校における教科指導の充実

地 理 歴 史 科

新学習指導要領における
改善事項を踏まえた「地理」の指導

栃木県総合教育センター
平成22年3月

ま え が き

総合教育センターでは、基礎・基本の確実な定着を図るための授業改善を目指して、教科指導の在り方について研究し、その成果を普及することにより、生徒の学力の向上に資することを目的に、平成17年度より、「高等学校における教科指導の充実に関する調査研究」に取り組んでいます。

近年の教育課程実施状況調査や学力に関する国際的な調査では、日本の児童生徒の学力の状況や学習に対する意識などが明らかにされ、文部科学省等からも学力向上のための様々な対策が打ち出されたり提言がなされたりしています。

また、平成19年12月に公表された、OECD生徒の学習到達度調査（PISA2006年）では、科学的リテラシーをはじめ、数学的リテラシー、読解力のそれぞれについて問題点が指摘されています。

さらに、平成20年12月には、国際教育到達度評価学会（IEA）が行った国際数学・理科教育動向調査の2007年調査（TIMSS2007）の結果が公表され、学力低下に歯止めがかかったという分析がある一方で、パターン化された指導の弊害とも見られる結果も一部に見られ、思考力の育成に課題があることも指摘されています。

これらの調査の分析結果を踏まえ、中央教育審議会答申を経て、平成21年3月には、高等学校の新学習指導要領が公示されました。数学と理科が24年度から、国語、地理歴史、公民、外国語が25年度から学年進行で実施されます。今回の改訂の主な改善事項として、「言語活動の充実」、「理数教育の充実」が示されました。これらは、先に挙げた各種調査で、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式の問題、知識・技能を活用する問題に課題が見られたことなどに対する改善策でもあります。

本調査研究においては、今年度、国語科、地理歴史科、数学科、理科、外国語科（英語）の各教科で、各種調査の結果から指摘されている課題と新学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえ、その解決を図るための授業改善について取り組みました。研究の成果をまとめた本冊子を有効に御活用いただければ幸いです。

最後に、調査研究を進めるにあたり、御協力いただきました研究協力委員の方々に深く感謝申し上げます。

平成22年3月

栃木県総合教育センター所長

瓦 井 千 尋

目 次

はじめに	1
事例1 地域の自然環境と防災（地理A）	6
事例2 地図の読図から言語活動への展開（地理B）	19
事例3 作業的な学習から言語活動への展開（地理B）	31
おわりに	43

※本資料は、栃木県総合教育センターのホームページ「とちぎ学びの杜」内、「調査研究」と「教材研究のひろば」のコーナーにも掲載しています。

「とちぎ学びの杜」 <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>

新学習指導要領における改善事項を踏まえた「地理」の指導

はじめに

1 調査研究の背景

平成21年3月9日に、新しい高等学校学習指導要領が告示された。今回の改訂のポイントとして、次のように、**言語活動の充実**、**学習習慣の確立**が挙げられる。

<高等学校学習指導要領 第1章 総則（抜粋）>

第1款 1 学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、生徒に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、生徒の発達の段階を考慮して、生徒の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、生徒の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない。

第5款 5 教育課程の実施等に当たって配慮すべき事項

(1) 各教科・科目等の指導に当たっては、生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実すること。

新学習指導要領の改訂に際しては、「OECD生徒の学習到達度調査（PISA調査）」や、文部科学省が小学校第6学年と中学校第3学年を対象に行った「全国学力・学習状況調査」など、各種の調査から明らかにされた、次のような課題が反映されている。

- ①思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題（無答率が高い）が見られる。
- ②読解力で成績分布の分散が拡大（成績中位層が減り、低位層が増加）している。
- ③家庭での学習時間の減少など、学習意欲、学習習慣・生活習慣に課題が見られる。
- ④自分への自信の欠如や自らの将来への不安、体力の低下といった課題が見られる。

特に、教科の指導においては、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させること、知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成することが重視されている。その実現のためには、「習得・活用・探究」のバランスを取った学習活動の展開が重要である。このことについて、新学習指導要領には、改訂の基本方針として次のように述べられている。

<高等学校学習指導要領解説 第1章 総説 第2節 改訂の基本方針（抜粋）>

②知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視すること。

確かな学力を育成するためには、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させること、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむことの双方が重要であり、これらのバランスを重視する必要がある。

このため、各教科において基礎的・基本的な知識・技能の習得を重視するとともに、観察・実験やレポートの作成、論述など知識・技能の活用を図る学習活動を充実すること、さらに総合的な学習の時間を中心として行われる、教科等の枠を超えた横断的・総合的な課題について各教科等で習得した知識・技能を相互に関連付けながら解決するといった探究活動の質的な充実を図ることなどにより思考力・判断力・表現力等を育成することとしている。

また、これらの学習を通じて、その基盤となるのは言語に関する能力であり、国語科のみならず、各教科等においてその育成を重視している。さらに、学習意欲を向上させ、主体的に学習に取り組む態度を養うとともに、家庭との連携を図りながら、学習習慣を確立することを重視している。

なお、学習指導要領の改訂に先立って発表された中央教育審議会答申には、言語に関する能力を育成するための、各教科における言語活動として、以下のような具体例が示されている。

<平成20年1月中央教育審議会答申（抜粋）>

- ・観察・実験や社会見学のレポート作成において、視点を明確にして、観察したり見学したりした事象の差異点や共通点をとらえて記録・報告する。（理・社）
- ・比較や分類、関連付けといった考えるための技法、帰納的な考え方や演繹的な考え方などを活用して説明する。（数・理）
- ・仮説を立てて観察・実験を行い、その結果を評価し、まとめて表現する。（理）
- ・体験活動を振り返り、そこから学んだことを記述し、まとめたものを発表し合う。
（特別活動・総合的な学習の時間）
- ・討論・討議などにより意見の異なる人を説得したり、協同的に議論して集団としての意見をまとめたりする。（特別活動・総合的な学習の時間）

これらのことから、学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえるとともに、各種調査等から指摘されている課題について、その解決を図るための教科指導の工夫改善を目指して調査研究に取り組んだ。3回の調査研究委員会を通して、評価の観点を踏まえた教科指導の在り方について、各教科ごとに研究協議を行った。本書はそれらの取り組みについて、授業実践を中心に報告するものである。

※本冊子の中では、平成11年3月に告示された学習指導要領を「現行の学習指導要領」、平成21年3月に告示された学習指導要領を「新学習指導要領」として記す。

2 地理における新学習指導要領への対応

平成20年3月に告示された学習指導要領の地理歴史科と公民科は、平成25年度入学生から年次進行で実施される。今回の改訂においては、地理歴史科と公民科を併せた主な改善事項として、「中学校社会科との関連の考慮」、「知識、概念や技能の活用」、「言語活動の充実」の三つが示されている。

また、地理歴史科に絞った改善の具体的事項としては、「地理歴史科各科目間の関連の重視」、「知識、概念や技能の活用」、「地図活用の重視」の三つが内容改善の柱となっている。

高等学校地理改訂の要点

(1) 地理Aの改訂の要点

ア 地理Aの目標

現代世界の地理的な諸課題を地域性や歴史的背景、日常生活との関連を踏まえて考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

新しい「地理A」の目標は、現行のそれと比べて「歴史的背景、日常生活との関連」という文言が付加された点が大きく変わっている。

イ 地理Aの改善に関する具体的事項

「地理A」については、防災などの生活圏の地理的課題に関する地図の読図・作図及び地域調査などの作業的、体験的な学習を充実し、実生活と結び付いた地理的技能を身に付けさせるとともに、環境、資源・エネルギー問題などの現代世界の諸課題や持続可能な開発の在り方などについて地域性や歴史的背景を踏まえて考察させ、地理的な見方や考え方を培うことを一層重視する。

今回の改訂においては、実生活・実社会とのかかわりをより強く意識して、地理の実用性・有用性を前面に出すという方向性が示されている。

ウ 地理Aの内容構成等の改善

〈新〉	〈現行〉
(1) 現代世界の特色と諸課題の地理的考察	(1) 現代世界の特色と地理的技能
ア 地球儀や地図からとらえる現代世界	ア 球面上の世界と地域構成
イ 世界の生活・文化の多様性	イ 結び付く現代世界
ウ 地球的課題の地理的考察	ウ 多様さを増す人間行動と現代世界(選)
(2) 生活圏の諸課題の地理的考察	エ 身近な地域の国際化の進展
ア 日常生活と結び付いた地図	(2) 地域性を踏まえてとらえる現代世界の課題
イ 自然環境と防災	ア 世界の生活・文化と環境
ウ 生活圏の地理的な諸課題と地域調査	(ア) 諸地域の生活・文化と環境
	(イ) 近隣諸国の生活・文化と日本
	イ 地球的課題の地理的考察
	(ア) 諸地域から見た地球的課題(選)
	(イ) 近隣諸国や日本が取り組む地球的課題と

新しい「地理A」では選択項目が廃止されたが、学習内容としては共通するものが多く、現行と同様に、作業的・体験的学習をふんだんに取り入れて地理的技能を育成するとともに、主に主題的な方法を基に学習できるような項目構成となっている。また、今回の改訂で重視されている課題を探究する学習として、大項目(2)の最後に「ウ 生活圏の地理的な諸課題と地域調査」を設けている。地域の国際化にかかわる問題に限定せずに生活圏における地理的な課題を探究し、日常生活と結び付いた地理的技能及び地理的な見方や考え方を身に付けさせることとしている。

(2) 地理Bの改訂の要点

ア 地理Bの目標

現代世界の地理的事象を系統地理的に、現代世界の諸地域を歴史的背景を踏まえて地誌的に考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

新しい「地理B」の目標は、現行のそれと比べて「現代世界の諸地域を歴史的背景を踏まえて」という文言が付加された点が大きく変わっている。

イ 地理Bの改善に関する具体的事項

「地理B」については、現代世界の自然環境、資源、産業、人口、都市・村落、人種・民族などに関する地理的事象の分布やその要因などについて体系的に考察させるとともに、それらの学習で習得した知識、概念や地理的技能を活用して、世界諸地域の地域的特色を歴史的背景に留意して多面的・多角的に考察させ、地理的な見方や考え方を培うことを一層重視する。

今回の改訂においては、系統地理的考察と地誌的考察を並列の関係ではなく、習得—活用—探究という学習プロセスを踏まえて、地誌学習に重点を置くことが示されている。

ウ 地理Bの内容構成等の改善

〈新〉	〈現行〉
(1) 様々な地図と地理的技能	(1) 現代世界の系統地理的考察
ア 地図情報と地図	ア 自然環境
イ 地図の活用と地域調査	イ 資源、産業
(2) 現代世界の系統地理的考察	ウ 都市・村落、生活文化
ア 自然環境	(2) 現代世界の地誌的考察
イ 資源、産業	ア 市町村規模の地域
ウ 人口、都市・村落	イ 国家規模の地域
エ 生活文化、民族・宗教	ウ 州・大陸規模の地域
(3) 現代世界の地誌的考察	(3) 現代世界の諸課題の地理的考察
ア 現代世界の地域区分	ア 地図化してとらえる現代世界の諸課題
イ 現代世界の諸地域	イ 地域区分してとらえる現代世界の諸課題
ウ 現代世界と日本	(中略)
	ク 民族、領土問題の地域性

大きな変更点として、現行の大項目(3)に代わって、新「地理B」では大項目(1)が加わった。現行の大項目(3)における項目間選択は、基礎的・基本的知識、概念や技能の習得の観点から、内容として示された項目を履修者全員が共通に学習できるようにするため廃止された。新たに加わった大項目(1)は、中央教育審議会の答申にある「地図活用の重視」という指摘を踏まえたものである。

もう一つの大きな変更点は、三つの大項目に指導の順序性が示されたことである。初めに大項目(1)で地図に関する基礎的・基本的な知識や技能を学ばせ、それを基に現代世界の諸課題についても大観する大項目(2)を学ばせる。その上で、「習得」した学習の成果を「活用」して、今回の改訂で重視されている課題を「探求」する学習を含む、現代世界の諸地域の特色や諸課題について学ばせる大項目(3)へと結び付けている。

本調査研究について

本調査研究では、新学習指導要領改訂の趣旨を踏まえ、研究協力委員が勤務校で担当する各科目において、地図を十分に活用するとともに、読み取ったり考察したり話し合ったりしたことを言葉や文章で表現するなどの言語活動の工夫を取り入れた「地理」の指導の改善に取り組んだ。それによって、習得した知識や技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の育成を図ることを目指した。なお、現行の学習指導要領においても、「各科目における指導計画の作成と内容の取扱い」において、「地図や年表を読みかつ作成すること」や「観察、見学及び調査・研究したことを発表したり報告書にまとめたりすること」などの様々な学習活動を取り入れることが求められており、各事例は、現行の学習指導要領の趣旨にも合致するものである。

各事例の実践内容は次のとおりである。

事例1 地域の自然環境と防災（地理A）

学校の周辺地域について、複数の地図を重ね合わせ、防災の視点から読み取れる事実やそこから考えられることを筋道立てて発表させることで、地理的な技能や思考力、表現力を身に付けさせることを目指した。

事例2 地図の読図から言語活動への展開（地理B）

地図から読み取れることを説明したり、考察したことを根拠を明らかにして記述したりする学習活動を通して、地理的な見方や考え方を身に付けさせるとともに表現力の育成を目指した。

事例3 作業的な学習から言語活動への展開（地理B）

グラフや地図を作成する作業的な学習と、そこから読み取れることや考察したことを表現する言語活動をあわせて行い、地理的な技能や思考力、表現力を育成することを目指した。

＜研究協力委員＞

栃木県立宇都宮清陵高等学校	教諭	樋山賢一
栃木県立真岡工業高等学校	教諭	高久順
栃木県立矢板東高等学校	教諭	見目亘

＜研究委員＞

栃木県総合教育センター 研修部	指導主事	阿久津如子
-----------------	------	-------